

[2]

氏名	陳 曉 傑
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	文博第 208 号
学位授与の日付	平成 25 年 9 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	日中近世儒学思想研究 ——天と人倫をめぐる思索
論文審査委員	主査教授 藤田 高 夫 副査教授 吾妻 重 二 副査教授 二階堂 善 弘

論文内容の要旨

陳曉傑氏の論文「日中近世儒学思想研究——天と人倫をめぐる思索」は、近世における日本と中国の儒学思想につき、天および人倫・社会に関する思索を中心に考察した研究である。考察の対象は朱熹、真徳秀、王守仁、王畿、李贄、中江藤樹、荻生徂徠、伊藤仁斎ら近世の中国・日本を代表する思想家であり、陳氏は中国と日本の諸文献を渉猟し、文化交渉学の視点にもとづいて朱子学・陽明学・日本近世思想相互の思想交渉および比較研究を行っている。

内容構成は以下のとおりである。

まえがき

前篇 「天」の思想の諸相

第一章 朱熹における「天」について

第二章 中江藤樹の思想と信仰——「我」と「上帝」をめぐる

第三章 荻生徂徠における天の問題

後篇 人倫思想の諸相

第四章 良知説・女性・聖人——陽明学のパラドックス

第五章 朱子学の君主観——真徳秀を中心に

第六章 君主・公私・親親——真徳秀の君主論と南宋理宗朝の政治

第七章 「同民之好悪」と「化民成俗」——伊藤仁斎の王道論をめぐる

結論

参考文献

初出一覧

「まえがき」では、本論文の視点につき「一国ナショナリズム」や「近代主義」に陥らない文化交渉・文化比較の視点による思想内部構造の分析であることが説明される。

前篇は天をめぐる思索についての考察である。これは近世儒学の人間や「人倫」の根拠は「天」に置かれたという理解による。

第一章「朱熹における『天』について」では近世儒学の中心人物である朱熹の「天」の思想が論じられる。ここではまず朱熹における「天」の重層性（主宰する天、理としての天、蒼蒼たる気化する天）を指摘する。このうち天の「主宰」とは主に「天が万物を創生する」ことを指すという。一方、形而上的「理」は形而下的「気」を生じることができないから、「万物を生じる」ところの「天」を抽象的な「理」に置き換えることはできないとする。さらに天が意志や心をもつのかについても詳細に検討し、いわゆる天地の「心」とは、天が万物を生み出してやまないはたらきそのものをいうとする。このように本章では、従来、朱子学における天と理が同一視されてきたことを再検討するとともに、朱子学のもつ言説の多様さに注意を喚起する。

第二章「中江藤樹の思想と信仰——「我」と「上帝」をめぐる」では日本陽明学の開祖とされる中江藤樹の思想が「我」と「上帝」の関わりを中心として考察される。藤樹は中国伝統思想における上帝への信仰に深く共鳴しつつ、みずからの体認に基づいて独自の思想を形成した。藤樹にとって、「上帝」は人の行為を監視して福や禍を与える超越的存在である。しかし「我」を「上帝」の「分身」する見方は、また上帝の内在性をも示している。ここには理想と現実を異なる次元に位置づけ、超越的上帝と人間の後天的営みを対立視する思考があり、また、良知が上帝の「分身」とされたことにより、倫理が宗教信仰の中に包摂されることになる。このような思想と信仰はもともと中国の陽明学にはない独自の内容をもっていると結論づける。

第三章「荻生徂徠における天の問題」では荻生徂徠における「天」の「不可知」性の内実および問題が考察される。徂徠において「天意」を確実に捉えるのは有限的人間にとってありえないことだが、「天意の在る所」すなわち大ざっぱな方向性を感じることはできるというのが徂徠の真意であった。したがって聖人にとって「天意を知る」ことは単なる政治的パフォーマンスでもないし、論理的矛盾でもないという。次に「天意を知る」ことはできないが「天命を知る」ことはできるという徂徠の主張が検討され、この場合の「天命」は要するに君子としての「民を安んずる」使命のことであるとする。そうであれば、君子はそのような自覚をもつことでみずからの人間としての能力を最大限に発揮しようというのが徂徠の「天命」の思想であり、ここに従来指摘されていたような矛盾はないと論じている。

後篇では人間と社会の問題、すなわち「人倫」に着目して考察が加えられる。

第四章「良知説・女性・聖人——陽明学のパラドックス」では宋明儒学の重要なスローガンである「人はみな聖人になりうる」の思想が取り上げられる。宋明理学において「女性は聖人になりうる」とはされず、陽明学においてさえそのような主張はなされなかったのはなぜかをめぐり、陽明学の聖人論と女性観の関係が検討される。陽明学は孟子の性善論を踏まえ、良知の先天性・内在性を信じる。この場合、女性は理論的に排除されないはずだから、問題は「良知論」の普遍性ではなく、「聖人」の政治的性格に関わっているという。すなわち、いかに「内聖」を強調しても、その目的はやはり「治国平天下」の「外王」

という理想にある。女性が聖人になれるとされなかったのは、女性は政治世界から排除されているところに原因があったとする。

第五章および第六章では朱熹に私淑し、朱子学の地位を高めるのに貢献した南宋の真徳秀を取り上げ、その君主観が考察される。まず第五章「朱子学の君主観——真徳秀を中心に」では、君主の「名」および君臣の名分を絶対視する傾向はすでに朱熹の思想にあったが、真徳秀はこの傾向をいちだんと強化した「絶対尊王論」者であることを詳細に論じている。続く第六章「君主・公私・親親——真徳秀の君主論と南宋理宗朝の政治」では、理宗朝において発生した政治事件「霽川事変」を取り上げ、儒学の公私観の視野のもとで真徳秀独自の君主論が検討される。伝統的公私観に依拠して済王の王爵を追奪しようとする権力者史弥遠らに対して、真徳秀は朱子学的公私観の立場を示し、終始「人倫を尽くす」ことに力点を置いている。さらに「君主」の位置づけについては、真徳秀は朱熹の思想を継承し、君主の「愛親敬長」の「私徳」はそのまま「天下」にまで影響しようとする。「内＝父子」と「外＝君臣」は共に「天理の公」であるから、どちらが優先するかに関して客観的方向性は確定されず、すべて君主の道徳的判断に委ねられているという。これもまた、君主個人の道徳がすべてに優先するという朱熹の思想を絶対化したものであると論じる。

第七章『同民之好悪』と『化民成俗』——伊藤仁斎の王道論をめぐって」は「同民之好悪」（民の好悪を同じくする）と「化民成俗」（民を化し俗を成す）をキーワードとして、伊藤仁斎の王道論を中国近世の儒学政治思想を比較しつつ論じる。陳氏によれば、仁斎の王道論は『孟子』に依拠し「民と好悪を同じくする」ことを最も重要な政治原則とするが、これに対して前近代中国の儒学思想においては、「民の好悪」はそのまま執政の基礎にはなりえない。興味深いのは、仁斎において、孔子が不正な風俗や行事に遭うと世俗に従う姿勢を示す人物として描かれることであり、このような孔子と「世俗」の関係は、仁斎と「世俗」の関係に重ねられているという。いわば、一介の匹夫として民の好悪に信頼するおだやかな人物像である。ところが、中国近世の儒学政治思想は儒者が「民の父母」＝民政官として地方を治めるという責任倫理をもつところに特色があり、「民を感化して良い風俗を成す」のを自己の責任とすることは、近世以降、中国の士大夫の基本的政治理念の一つになっていた。これはもともと孔子の「風教論」に遡り、仁斎もむしろこれに賛成するが、その「化民成俗」に対する態度は極めて消極的であるという。というのも、仁斎の考える政治構造は「君主一庶民（匹夫）」という単純なものであり、中間的・媒介的身分である士大夫の存在を無視しているからであると指摘している。

結論においては、以上の全七章にわたる論文の内容を整理している。

論文審査結果の要旨

陳氏の論文は近世における日本と中国の儒学思想を文化交渉・文化比較の視点にもとづき、旧説に訂正を迫る意欲的な内容をもっている。論点は多岐にわたるが、主な成果としては主に次の三点があげられる。

第一に、天の思想に関する考察が重要である。朱熹、中江藤樹、荻生徂徠らの「天」も

しくは「上帝」をめぐる思索は彼らの哲学思想の根底をなすものとして重要な位置を占めるが、この問題につき朱子学、日本陽明学（中江藤樹）、日本古文辞学（荻生徂徠）という近世を代表する思想をとりあげ、その特色を論理的に探求し、また問題点を指摘したことは比較思想的成果として貴重である。

第二に、陽明学と聖人可学論をめぐる考察が挙げられる。「人は学問によってみな聖人になりうる」というスローガンは近世中国儒学（朱子学、陽明学）における基本原則であり、それは自然哲学にもとづく人間観によって理論的にも裏付けられていたのであるが、なぜか「女性が聖人になりうる」とは主張されなかった。この問題は人間観というより、儒学における「聖人」の政治的性格にあること、女性が政治世界から排除されていたことに理由を求めており、儒学の間観や女性観、聖人論につき新たな知見を示している。

第三に、伊藤仁斎の王道論に関する解明がある。通説では、仁斎は「理」にもとづく朱子学を批判し、人間的心情を信頼する思想を提示したとされるが、陳氏はそのような主張が政治的にどのような特色をもつのかを、中国と日本の政治社会的体制を念頭に置いて解明している。仁斎は中国近世におけるような行政官＝士大夫ではなく、したがって「化民成俗」の主導者としての儒家の立場を見落としていたという指摘はきわめて鋭い。このような士大夫＝行政官としての儒者とそうでない儒者という捉え方は、他の日本近世思想を論じる際にも有効であり、また韓国やベトナムの儒者との比較を行う際にも重要な視点となりうるであろう。

陳氏の論文は日本と中国の近世儒学思想の共通基盤を構築する試みであり、本論文の着想は「日本・中国の近世儒学思想の通史を描くことではなく、日本と中国の近世儒学思想を同じ土俵で考える「枠組み」を提供すること」にあった。残された課題は多いが、日中両国の近世儒学思想における重要な論点を取り上げて比較研究を行い、従来の研究に新たな知見を付け加えることができたといえる。

なお、論文の分量としても400字詰め原稿用紙約400枚相当の分量となっている。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。